

---

# 紅蓮の願い

電撃お兄さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅蓮の願い

### 【Nコード】

N8943K

### 【作者名】

電撃お兄さん

### 【あらすじ】

???は知らない……。

巻き込まれ、飛ばされた先で一人の少女を悲しき運命から救うことを…。

また???も知らない……。

友と再開し狂った歯車を正し、二人の絆をより強固にしてゆくことを……。

そして外史の管理者である???も知らない……。

あるべき姿に戻そうとする行為が自らを苦しめていくことを……。

すべての道はやがて交わり統一を果たす。

散って逝った仲間の願いをその身に受けながら……。

現在第一章編集集中でふ

## はじめに

モバゲーにて執筆していた作品をこちらに移すことにしました。

PCから投稿していますが、家からではないので更新は不規則になると思います。

拙い文章と少ない語彙を駆使しているので見苦しい点もあるかとf

^ | ^ ;

それでもよろしければどうぞご覧ください。

小説の一部の設定は「タンデムの書庫」というサイトの管理人様に許可をいただいて使用させてもらっています。

主人公はオリジナルキャラで、どれぐらいの強さになるかはまだ未定です。

## キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介は登場ごとに随時追加していきます

## キャラ紹介

香具山恭介

18歳 178cm

頭の回転は早いほうだが、学校では友人と騒ぎばかり起こしていたので周りからは馬鹿だと思われる。

自分の保護ということにあまり興味がないので悪口は気にしていないだが気を許した友人を虚仮にされると相手を叩きのめす。

（本人曰く冷静に打ちこえる場所を考えながらこぼこぼこにしているらしい。）

かつて全治6週間の大けがを負わせたこともある。

過去や未来を夢で見ることがあるが自分で選ぶことができないうえに、見知らぬ人間の先行きも見えてしまうので、だいたいは関わることはない。

香具山流二刀の免許皆伝の実力を持つ

太刀と脇差をうまく組み合わせて連撃による斬撃を得意とする。

また1対多の動きも理解しているので槍・薙刀も人並みに扱える

基本的に初対面、あるいは他人には丁寧な口調を心がけている。

## 序章

恭介「ふっ・・・せいっ・・・ふっ・・・」

がらんとした朝の道場に声が響く。

かれこれ三時間は竹光を振り続けただろうか・・・  
いつのまにか日が山の向こうから顔を出していた。  
ふと時計に目をやると7時を回っていた

恭介「ふんっ！！・・・っつ、はぁ・・・はぁ・・・」

その場で大きく息をついて呼吸を整える

恭介「うし。素振り終了。そろそろあがるかな」

竹光を壁に立てかけてその場に座り、持ってきていたおにぎりをほおばり、お茶を飲んでふうと息をつく

恭介「今日は調子がよかったなあ。いつもより体が軽かったおかげで割と楽に鍛錬ができた。」そういいながら体を起して道場を後にする

母屋に戻って制服に着替えた後、学校の支度をする。

教科書がなかなか見つからず、結局家を出たのは8時前になった

恭介「まずいな、間に合うかどうか・・・遅刻かなこりゃ？」

最悪朝からダッシュになるかもしれないと嫌な想像をして、思わず

ため息が出る。

学校までは走って35分はかかる。30分にはつかないと100字の漢字書きとりなんてものをやらされてしまうので何としても間に合わなければならぬ。

しかたなく走っていくことにした。

残り時間が15分で学校まであと半分という位置まで来たとき、少し先の路地を友人の北郷一刀が必死の形相で入っていくのが目に入った。(ただ事じゃなさそうだな。ま、ちよいと覗いてみますか……どうせ遅刻なんだし……)

そう考えて一刀の後をつけてみることにした

路地に入り、奥の角をまがろうとしたとき、一刀の声が聞こえた

一刀「はあ……はあ……やっと……追い詰めた……ふう……さて……この誰かは知らないけれどその鏡を返してくれ……それは大事な家宝なんだ」

どうやら一刀の家にこそ泥が忍び込んで家宝を盗んでいったらしい恐らく神棚に置いてあったあの鏡のことだろう

どんな奴が盗んだのが角から覗いてみると、歳は同じくらいだろうか、なかなか強そうな男が片手に鏡を持って一刀に相對していた

???「ふん……そんなこと俺が知るか……」

(なんとも尊大な態度だな。盗つ人猛々しいとはこのことが……)

と変に感心していると、男と一刀が戦い始めた

(…ほう…)

と男の戦い方に思わず感心した

一刀も俺と同じように剣術を習っているので、たまに軽く打ち合いをしているが、あいつは結構筋がいい  
だがその一刀が防戦一方だ

一刀「く……っ！」

一刀が苦悶の表情を浮かべた

一撃一撃が重いらしく、また的確に人の急所を打ち抜く軌道である  
ことが見てとれた

???「チツ……しつこいな」

一刀「おわあっ！あ…危ね…てめえ一体何者だ？どうして家の家宝を盗みやがったっ！？」

男はちらつと鏡をみた

???「これか…？ふん…おまえらには必要のないものだからな。  
奪って何が悪い？」

一刀「な……っ」

???「尻尾巻いて逃げれば許してやろう。今日起こったことは全部忘れるんだな」

一刀「ふざけんな！盗人が偉そうに、何様の……」

「???「そうか…ならば死ね！」

一刀「がっ…！」

不意をついた一撃だったためか直撃した。そしてそのまま吹き飛ばされ壁に激突した

しかし当たる直前に身体をずらしていたようで急所への一撃は避けられていた

「???「急所を外したか…：まあいい。しばらくはのびているだろう…」

男はそう言うところらを向き

「???「いるのはわかってんだよ…出てこなきゃそれでいい。いやむしろ出てくんない…」  
と言った

恭介「いやあ、そういわれると出たくなるんです」

「ついつい身体が前に出てしまった  
強い奴を見ると戦いたくなるんだよね  
この衝動どうにかしなきゃな

恭介「一手お願いするよ」

「???「ったくついてない。簡単な仕事だったはずなのに」

男はため息をひとつついた

恭介「そりゃご愁傷様」

「さつさとくたばれ……！」

そう言う男は一気に間合いをつめる

「シッ……！」

おとこは上／＼右／＼左と立続けに拳と足を織り交ぜながら繰り出す

恭介「つとお……！危ないねえ」

おれは上体を反らしながら捌いていく

「チイツ……！なら！」

と右から足をはらいにくる

恭介「おっ……と」

俺は後ろに跳んでかわす

「ちょこまかと……なっ！」

恭介「ニヤリ……隙あります！」

相手があしばらいでほんの一瞬崩れた瞬間を狙って、後ろに跳んだ反動を使い低い姿勢から一気に地面を蹴り間合いを詰める

もちろん狙いは男ではなく鏡の方だ

「しまった……！ええい」

男は後ろにさがる

そのため鏡に手は届いたものの指がかかっただけだった  
しかし男もしつかりと持っていたわけではなかったので鏡が手から  
こぼれ落ちる

???「なっ……!」

恭介「やばっ……!」

そして鏡は地面に落ちて割れた  
???「くそっ……なんてことだ……これでは……!」

男は割れた鏡を見て茫然としていた

恭介「まずったな……一刀に怒られ………うん?」

その時割れた鏡から光りが溢れ出した

恭介「なんだ…これ…」

その時男が笑った

???「くっくく…もう遅い…。門は開かれてしまった。ならば  
俺は仕事をするでしょう!お前は精々足掻くがいい!それが貴様  
の罪だ!」

恭介「それはどういう…!」

光りはそうしているうちにどんどんと広がり、ついに自身の身体を

包んだ

恭介「うわっ……！」

そして一刀の身体を包みこんだ後、光りは消え失せそこにいた三人の姿も消えていた

## 第一章

恭介「うおっ・・・！」

鏡から放たれた光の眩しさに思わず目をつむる。

ほんの数瞬宙に浮いているような感覚がした後、硬くごつごつとした地面に尻をついた。

恭介「いつてえ・・・」

どうやら思い切り尻もちをついたようでかなりの痛みだった。

恭介「・・・ん？」

目をあけるとそこは先ほどまでいた都会のと真ん中ではなく、あたり一面草木のあまりはえていない荒野のど真ん中にいた。

恭介「はて・・・？なんで俺はこんなところに？」

さっぱりわけがわからなかった。

ここはどこでいったい何が起こっているのかを考えうんうん唸っていると、不意に後ろから声をかけられた。

「・・・おい・・・」

振り返るとそこには黄色い布を頭に巻いた男たちが・・・何人だろう？20人くらいか・・・警戒感丸出しで剣を手にしていた。

「???」「何者だお前・・・いきなり空が光ったかと思ったら、現れやがって」

恭介「何者だといわれても、私はただの学生ですよ？あなた方のほうこそ何者ですか？」

「???」「あん？何者ってお前・・・この黄色い布で分からねえか？」

恭介「あいにくと世情に疎いもので」

「???」「黄巾党だよ黄巾党！この大陸でもっとも偉大な勢力だぜ」

黄巾党、黄巾党・・・確かまだ魏・呉・蜀の三国が興る前、後漢末期の時期に暴れまわった勢力のことだよな

編集中でふ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8943k/>

---

紅蓮の願い

2010年10月9日22時29分発行